

## 細江カトリック教会だより 7月号



〒750-0016 下関市細江町 1-9-15

☎083-222-2294

☎083-222-0970

広島教区テーマ；平和の使徒となろう

チャレンジ 新しい福音宣教 ～わたしをお使いください～

—家庭へのチャレンジ—

### アメイジング・グレイスと 「慈しみの特別聖年」

今回の話では、誰もが知っているあの名曲「アメイジング・グレイス」と教皇フランシスコが呼びかけている「慈しみの特別聖年」とのつながりについて考えたいと思います。「アメイジング・グレイス」はとても美しいメロディを持っているうえで、神様の限りない慈しみを示す賛美歌でもあります。神様の慈しみの深さと広さを感じ、それによって人生が変わったとされているある人物の経験から、この歌が生まれたのです。カトリック教会は、慈しみの特別聖年を祝うこのときこそ、この歌から学ぶべきことがあると思います。

賛美歌「アメイジング・グレイス (Amazing Grace)」は、イギリスの牧師ジョン・ニュートン (John Newton, 1725-1807) の作詞とされています。ジョン・ニュートンは 1725 年、イギリスの敬虔なクリスチャン家庭に生まれ育てられました。ジョンは商船の指揮官であった父の仕事を受けつぎ、のちには黒人奴隷を輸送するいわゆる「奴隷貿易」に手を染め、巨万の富を得るようになりました。しかしこれは、当時 2 歳だったジョンの人生の転換点となります。

「当時奴隷として拉致された黒人への扱いは家畜以下であり、輸送に用いられる船内の衛生環境は劣悪であった。このため多くの者が輸送先に到着する前に感染症や脱水症状、栄養失調などの原因で死亡したといわれる。ジョンもまたこのような扱いを拉致してきた黒人に対して当然のように行っ

ていたが、1748 年 5 月 10 日、彼が 22 歳の時に転機はやってきた。船長として任された船が嵐に遭い、非常に危険な状態に陥ったのである。今にも海に呑まれそうな船の中で、彼は必死に神に祈った。敬虔なクリスチャン家庭に生まれたが彼が心の底から神に祈ったのは、この時が初めてだったという。すると船は奇跡的に嵐を脱し、難を逃れたのである。彼はこの日をみずからの第二の誕生日と決めた。その後の 6 年間も、ジョンは奴隷を運び続けた。しかし彼の船に乗った奴隷への待遇は、動物以下の扱いではあったものの、当時の奴隷商としては飛躍的に改善された。1755 年、ジョンは病気を理由に船を降り、勉学と多額の寄付を重ねて牧師となった。そして 1772 年、「アメイジング・グレイス」が生まれたのである。この曲には、黒人奴隷貿易に関わったことに対する深い悔恨と、それにも関わらず赦しを与えた神の愛に対する感謝が込められている。」

(ウィキペディアより)

「アメイジング・グレイス」の歌詞は次のようになっています：

「驚くほどの恵み、なんとやさしい響きだろう。私のような罪深い者さえも、あなたは救われた。」

(和訳：<http://smsgostudy.blog.fc2.com>)

奴隷貿易に関わってきたことを心から反省し、新しい人生を送るようになったジョンは、その後、奴隷制度廃止のために人生を尽くしたとされています。

人間に対しての神様の慈しみのありさまについて、教皇フランシスコは次のように語っています。



「私たちはみんな罪人です。でも神様の限らない恵みと慈しみと優しさによって癒されているものです。」(教皇ツイート2013年10月28日)

「アメイジング・グレイス」の歌詞のように、どんなに罪深い状況に置かれている人間でも、そこから抜け出し、神様へ立ち返り、再出発できるのは、神様の慈しみの結果です。それは教皇様がいうように、私たちはいつも神様の優しさに包まれているからです。イザヤ書は次のように言っています。「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。」(イザヤ 59:1) 人間がどんなに悲惨な状況に置かれたとしても、神様に救えないほどのものではない、ということこそ神の慈しみの特徴です。一人ひとりが神様からいただいているこの慈しみの業を周りの人々にも示していくことが、慈しみの特別聖年を祝うことにあたって神様が望んでおられることではないかと思えます。

ジェームス・ボニー神父



## シリーズ 地区だより II

### 家庭へのチャレンジ

#### ・・・家庭での祈り・・・

私が幼い頃は、家族揃って朝の祈りから始まり、食前・食後の祈り、夕の祈りを毎日唱えていました。近くに教会もあり、周り近所は信者という所だったので、教会は子どもたちの遊び場にもなり、いろんな行事もありました。祈りや公教要理を覚えさせられ苦痛に感じる事もありましたが、祈ることが日常であたりまえの事になっていました。

大きくなるにつれ、環境の変化や人との付き合いも広がり、他の事に目が向いて祈ることが少なくなりました。

我が家の子どもたちも小さいうちは一緒に祈っていましたが、成長と共に個々の生活があり、クラブ・塾・習い事・友達付き合い等に忙しく、疲れてしまい、祈ることを忘れていきます。この状態でこれからの信仰について心配していますが、親の思い通りにはならず、ただ祈るだけです。

これからも、朝晩家族のために祈りを忘れないようにしようと思っています。

新地筋川地区 S.K

## ボランティアの集い 6/4



### 傾聴の研修会 (ボランティアの集い)

に参加して

彦島教会 福永 孝章

6月4日長府教会で行われたボランティアの集いに初めて参加しました。予想を上回り80人ほどが集まり、大盛況でした。講師の石田先生の話は、初めて聞く私にもわかりやすかったです。傾聴ボランティアとして働くことはないと思っていた私ですが、話を聞いてほしい友人や家族に対する対応の仕方に応用できる方法を学ぶことができ、ラッキーと思いました。これまでは、相談してくる相手に、適切で説得力のあるアドバイスができるかどうかいつも心配になり、うまくできなかつたと思うことが多い気がしていました。しかし、石田先生のお話では、傾聴というのは、ただ相手の話を聞いて、復唱するだけでよく、アドバイスはしなくてもよいということで、これなら自分でもできると思いました。しかし、午後からの私が参加したグループの分ち合いでは、多くの出席者が、実際に電話で話を聞いている体験や、病者や老人の訪問のときの体験をなまなましく話してくださいました。それを聞いて、人のために喜んで自分の時間を提供すること、つまらない話やどうにもならない話に黙って付き合うことは、大変なボランティアで、私のような自分勝手な人間にはとてもできないことだと思いました。傾聴のテクニック以前に、ボランティア精神を育むことから始めないといけないと思わされた研修会でした。



＊講師の石田氏を紹介する李神父。

## 各種活動グループ紹介

### ＊マリアンマルタの会を

どうぞよろしく！

このグループは、2005年に細江教会の信徒の中から生まれました。ネーミングはマリアとマルタをバランスよく兼ね備えた聖母マリアを模範に、少しでもその生き方に近づけるようにとの願いを込めたものです。

発足趣旨は「喜びの奉仕と共同体一致の体験」です。細江教会の信徒間のより一層の理解と親睦のためでもあります。無理なく息の長い地道な集いでありたいと、活動は年2回のマドレーヌ作りと年1回の黙想会だけに限っています。

私たちのささやかな活動がわずかでも細江教会共同体の活性に繋がるようにとの思いで、現在名簿上では30余名が会員として名を連ねています。マドレーヌの売り上げは毎回取って信徒会へ納めます。私たちが細江教会共同体の一員であることを自覚し、信徒会の充実を願ってこそこのこだわりです。

これからも、お互いを受け入れ思いやり、キリスト者としての歩みを支え合い励まし合っていきたいと思っています。この会は小教区の中の気の合った者同士の同好会的なものと言うよりは、信仰共同体のより良い一致のための小さな一つの起点であればと思っています。(不遜で壮大な理想に自ら押しつぶされそう…)

この数年残念ながら、黙想会が実施できておらず今年こそは…と、あれこれ思案中です。メンバーそれぞれがさまざまな事情を抱えており、年に一度一日を共にすることも難しいのが現状です。今こそ10年前の初心に戻り、時にマリアのように、時にマルタのように、諦めることなく焦ることなく、その時々必要に応じて柔軟に奉仕と祈りを捧げ続けていきたいと思えます。

皆様のご理解と応援と入会と…よろしくお願いいたします。

マリアンマルタの会一同

### 聖体奉仕者を終えて

☆ この6月末をもって、2年間の聖体奉仕を終える事になりました。先週の19日、堅信志願者の為の研修会を傍聴して、その折いただいたプリントが私の手許にあります。

このプリントには、昨年作製された“聖書いろはかるた”の中の一枚で、『聖霊に満たされた使徒は宣教に』という詩によって、使徒たちそれぞれの頭の上に、炎のような赤い舌がとどまっている、聖霊降臨の絵が掲げられています。ここに書かれていないかるたの解説は「彼らに信仰の理解と証言のための力を与え、福音宣教に遣わした」とあります。

聖書かるたは、詩の監修と解説、又50枚弱に及ぶ場面ごとの絵も全部、百瀬神父様のお手によるもので、温かく味わい深いかるたができました。この日神父様がお話しになった(聖霊の注ぎを受けて、困難にめげずに信仰を生きぬく力と勇氣、報いを期待せずに人のために尽くす愛、日常生活の中で神のみ旨を識別する英知をいただく)というお言葉は、奉仕にかかわっている私の心に芽生えたお恵みそのものでした。

昔、初めて集会祭儀・聖体奉仕者に任命された時は、奉仕とはいえ神父様に代わって御聖体にかかわるなど、そんな大それたことが私にできるのかという、畏怖感に駆られたのを思い出します。2年前、二度目の奉仕者に任命されて当初不安だったのは、加齢による自身の体調でしたが、今二度の奉仕体験からさきの事を思い返しますと、奉仕に対する責任から心身の節制と自己管理ができた事、最初感じた怖れや不安が、いつの間にか感謝と喜びに変わった事、それらにまして聖霊のたまものを体感できたのは、この奉仕による大きな実りとお恵みでした。今、私は年を重ねて身体的には役立たずでも、祈る事はできる。大切な人のために、見知らぬ人のために、自分のために、主が可としてくださる事を確信して、祈る事ができる喜びを実感しながら生かされています。神に感謝。

森 正子



☆ 聖体奉仕者に任命されてあっという間の2年が経ちました。その都度、身の引き締る思いや“神さまに感謝”の心で奉仕させていただきました。

特に気をつけたことは、体調を崩さないこと、身綺麗にして臨むことでした。これは、奉仕する皆さまも同じ思いだったことでしょう。

今後も、この貴重な経験をふまえて、ミサの大切さや意味合いを十分に深めていきたいと思えます。

福音書を前に・・・頭に刻み、口で宣べ伝え、心の奥深くに染み渡らせて・・・  
「いざ！勇気を持って、歩いていこう！」

近藤 豊之



## 幼稚園行事

◇幼稚園園庭と周辺の清掃活動の協力  
6/18 (土) 9:00～10:30

＊日和山の階段付近の崖。  
百瀬神父さまとボニー神父さまを筆頭に、先生たち、園児の保護者の方々と一緒に、参加信徒7人と三村さんのお孫さんが活躍して、無駄な草木の剪定と草引きを行った。



＊昨年、バツサリと切った樹々が、大きく育っていてまた伐採する。階段にはヨモギの草も大きく茂り、引き抜くとセメント部分も欠けてくる。自然の力は底知れず。

＊小さい姉妹会のシスターも汗だくだく。



作業後は爽やかな気分になり、  
みなさん「お疲れさま～」でした。

◇幼稚園プール開きの様子 6/27 (月)



＊曇り空でしたが、園児たちは“ワクワク”元気な顔・顔。

百瀬神父さまのお祈りの後に、一番乗りの A さん（年長さん）。少し肌寒いので恐る恐るプールへ入りましたが、楽しそうでした。



＊次は、C さん（年少さん）のグループです。可愛い～姿を見せてくれました。プールの水はまだ少し冷たい～！

## 訃報

6月28日（火）

ヨゼフ三末篤實名誉司教  
（広島教区元教区長） 帰天

いつも温かい笑顔の司教さまでした。  
天の国で、私たちを見守ってください。

永遠の安息をお祈りしましょう。